

5表 実験群と統制群、知能点および国語、算数の成績

項目 群	知能		国語		算数	
	平均	分散	平均	分散	平均	分散
実験群	16.8	42.70	27.4	110.04	34.8	142.40
統制群	16.7	43.14	27.6	112.84	37.0	136.18

ノ知能・国語では分散・平均に有意の差が認められない。

ノ算数では分散に有意の差が認められず、平均では著しい有意の差が認められない。

(4) 実験群と統制群の学習効果の比較

A 学期末の学力検査

第一学期末の研究部が作成した国語の学力検査問題一小問数56-について、実験群と統制群の学力を検査した。

6表 第一学期末の両群の国語の成績

群	成績	平均	分散
実験群		27.6	92.05
統制群		28.6	87.84

第二学期末も国語の学力検査問題一小問58-を作成して両群の学力を検査した。

7表 第二学期末の両群の国語の成績

群	成績	平均	分散
実験群		22.4	12.37
統制群		23.8	16.51

これらの結果をみるに、ともに実験群の成績が悪い。これは、教師・児童ともに旧来の指導法、学習方法との間に混乱を生じているがために、学力が高められなかったことを示していると思われる。分散においては第二学期の分散が小さくなっているが、これは優秀な児童の内にもまだ十分学習の方法が身につかず、従って十分な伸びを示していないことなどによるものと解釈される。

B 学年末の学力検査

学年末の学力検査はその客観性を高めるため、国語の学力検査問題の作成を付属小学校に依頼した。

この検査問題の小問数は120でその正答状況は次のようである。

8表 (1)学年末の両群の国語の平均・分散

群	成績	平均	分散
実験群		53.7	486.49
統制群		53.7	389.69

8表 (2)学年末の両群の国語の領域別の成績

領域 群	文字の力	語句	ことばに関する こと	読解Ⅰ	読解Ⅱ
	(52)	(21)	(23)	(12)	(12)
実験群	19.4	11.7	12.1	6.5	4.5
統制群	19.5	12.2	11.7	5.9	4.3

実験群の平均がここではじめて統制群と一致している。これは教師・生徒がようやく「望ましい学習」の指導のあり方、および学習の仕方を身につけつつあることを表わすものといえる。ことに分散が増大していることは学習のあり方が総べての児童に判ってきたのではなく、上位または中位の児童がこれを体得して除々に学習効果を高めつつあるのに反し、下位の児童はいまだにそれに到らず学習につまずきを示しているがためによるものと思われる。なお実験群の領域別の読解Ⅰ・Ⅱの成績がよいのは「望ましい学習」がその本領を発揮し始めてきたことを示すものといえる。

「望ましい学習」第一年の結果は特にきわだったものを示してはいないが、これを持続すれば今後どのような結果をきたすかは、一応予想できるものと思われる。

3 昭和36年度の望ましい学習指導法の実証的研究

(1) 目的

「診断的性格を帯びた福島県標準学力検査問題」の実施の結果を誤答分析し、学習のつまずきから考えられる、国語科の「望ましい学習指導法」の実証的な研究を行なって、国語科学習指導法を確立し児童生徒の学力の向上を図ろうとする。

とくに本年度は、次のことを主たる目標にする。

- ① 「望ましい学習指導法」の具体化を図り、指導例を、授業記録によって提示する。
- ② 「望ましい学習指導法」の学習効果を検証する

(2) 研究のしくみ

① 実験のための学年は、国語科としてのやや高度な技能や態度を必要とする5年生として、小中学校に通じる指導法を確立する。

② 上記の目的に添うように学校および教師の諸条件が同質に近い24学級を選定し、うち12学級を実験群(A)に、他の12学級を統制群(B)とする。

③ Aの学級担当者を研究員として県教育委員会より委嘱し、月一回学校持回りて当指導法に添った授業の研究をしながら、次期指導の打合せを開く。

④ 指導法が定着する11月ごろ、一題材をとらえて授業の記録をとり、子どもの理解過程を分析する。

⑤ 学習効果の測定は、5月に学力検査と知能検査を実施し、AとBの児童の条件が均質になるように整えて、学年末に他県の学力検査問題を用いて検証